

西洋古典学

◇教員◇

教授：日向太郎

助教：松浦高志

◇学生◇

学部：6名、修士課程：7名、博士課程：9名

(1) 西洋古典学とは

西洋古典学は、今日まで伝わっている古代ギリシア語およびラテン語で記されたあらゆる文字資料を対象とする学問である。これに加えて、さまざまな考古学資料、遺跡などが考察の範囲に入ることもある。また、すべての文字資料と言ったが、印刷された校訂本はもとより、写本、パピュルス、碑文も含まれる。そして、古代ギリシア語およびラテン語そのものを体系的に、歴史的に、分析的に研究することももちろん我々の学問の根幹をなしている。

まとまった形で残っている古代ギリシア語の最古の文献は、ホメロス叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』である。ただし、両作品の成立過程は今なおヴェールに包まれている。伝統的にアオイドスやラブソドスと呼ばれる朗唱者によって口演されてきたと考えられるが、いつ頃文字に記録されて書物となったのか。いまだ結論は出ていない。とはいえ、ホメロス叙事詩はジャンルを超えて韻文全般に影響を及ぼし、哲学者に引用されて議論の俎上に載せられ、歴史家たちの考証の対象ともなった。いわば、最古の古典にして、古典のなかの古典といってよいであろう。アオイドスやラブソドスが単に朗唱に携わるのみならず、作品を解釈し聴衆に解説する役割を担っていたのだとすれば、彼らは我々にとっての始祖である。

そして紀元前3世紀から2世紀にかけて、ヘレニズム時代には、各地に流布していたホメロス叙事詩の写本がエジプトのアレクサンドレイアの図書館に集められ、本文批判が行われた。それは、真正なるホメロスの言葉とは何かを探究する営みであり、ここに我々の研究の原点がある。現在我々が手にするホメロス叙事詩の校訂版は、このときの編集事業に拠るところが大きいと思われる。

ヘレニズム時代には、重要な文学的思潮も生み出された。それ自体緻密なホメロス研究とも大いに関わっていると思われ、カッリマコスという学者詩人に帰される一種の文学綱領である。カッリマコスは、ホメロスに追従して大作を手掛けることやその安易な模倣を戒め、学殖に基づく機知と諧謔に富む洗練された小品を推奨した。

さて、ラテン語で作られた最古の文学作品は、リウィウス・アンドロニクスの『オデュッセイア』のラテン語訳である（ただしまとまった形では現存せず、断片的に伝わるのみ）。ラテン最古の作品が『オデュッセイア』であることは、ホメロス作品がいかにも人々の心を魅了していたかを物語っている。ラテン語文化圏でも、ホメロスは古典のなかの古典として崇拝と憧憬の対象となった。その一方で、カッリマコス主義もラテン語韻文に影響を及ぼし、それはとりわけ紀元前1世紀の古典期の作家に認められる傾向である。だからこそ、ウェルギリウスは『イリアス』や『オデュッセイア』の両作品を徹底的に研究して、カッリマコスの理想にも敬意を払いながら、建国叙事詩『アエネイス』を創作することになったのである。

もちろん、ラテン語作家の手本や研究対象になったのはホメロス叙事詩ばかりではなく、ギリシアの抒情詩、悲劇、喜劇、諷刺詩、哲学、歴史、弁論、自然科学もローマ人に大いなる影響を与えた。しかし、だからといってローマ文化をギリシア文化の亜流に過ぎないと考えるのは、誤りである。そのような見方が優勢になった一時期もあったが、現在ではそれは乗り越えられている。ラテン語作家の営為は、いわば換骨奪胎を基本とする創造的模倣である。翻訳のみを通じて観察した場合、それはたしかに見えにくいけれど、こうした模倣の試みは、言語の別を越えて中世以降のヨーロッパ文学の神髄となったと思われる。そして、ギリシア文化の多大な影響を受けたローマ文化は、ヨーロッパ中世において古典として長いあいだ尊重され、受け継がれてきたのである。

とくにラテン語は、知識人のあいだの共通語だった。ヨーロッパの大学では、長いあいだこの言語で授業が行われ、口述試験がなされ、式典が祝われた。学術書や文学作品もラテン語で書き続けられた。公共の文書もごく私的な書簡もまた同様である。カトリック教会は、20世紀まで典礼の言葉として用い続けた。ラテン語が浸透していたのは、学問の世界だけには留まらない。

つまり、伝統的に、中世以降のヨーロッパ人にとっては、厚みのあるロー

マ文化の方がずっと近くて親しみ深く、ラテン語の著書のはるか向こうにギリシア文化を仰ぎ見る、というような古典語文化との接し方が定着したのである。

欧米文化圏においては西洋古典学の研究と教育の伝統はこのようなものとして、今日まで長く受け継がれてきた。しかし、ひとたびこの文化圏の外に出れば、事情は異なる。たとえば、日本から見れば、上述のようなギリシア文化とローマ文化との距離差はない。二つの文化はともに遠い距離にあるように感ぜられるかも知れないが、どちらがより近いということもない。本学において西洋古典を学ぶ積極的な意義は、そのような距離感覚にしたがって、欧米の研究教育機関で学ぶのとは異なった視点を必ずと得られることにある。さらに言えば、日本文化を視野に入れながら、西洋古典学に貢献する可能性も開かれている。

また、古代ギリシア語もラテン語も、我々にはまぎれもない外国語であるが、今日この外国語を母語とする人はいない（もっとも母語のように解し、操る人は皆無ではない）。二つの言語は、いわゆる「ネイティブ」がない言語なのである。もちろん程度の差はあるが、現在生きている人の誰にとっても、「外国語」には違いない。その点にも、この両言語を学ぶ面白さがあるだろう。

(2) 本専修課程について

このように、ホメロス叙事詩を出発点として、我々が研究対象とすべき文献は幅広い。じっさい本専修課程に所属する学生たちの興味の範囲も様々であり、卒業論文のテーマもまた多様である。しかし、すべての研究において基礎となるのは、古代ギリシア語とラテン語を理解する能力である。このため、学部でも大学院でも、授業においては伝統的に講読に力を入れている。古代ギリシア語・ラテン語、さらに韻文・散文に偏ることなく学習できるように、両言語による韻文講読と散文講読の授業を S、A の両 Semester にわたって開講するように配慮している。ほとんどの授業は大学院と共通であるが、学部生は大学院生や上級生とのレベルの差について、決してひるむことなく、また遠慮することなく受講して欲しい。前期課程において両言語の初等文法を一通り学び終えていることは望ましいが、それは決して進学のための要件ではない。文学部においても初級の授業を受講することは可能である。また、文学部では、哲学、美学、西洋史

の各研究室が毎年古典語文献を用いた授業を開講している。教養学部の後期課程においても、複数の教員が古典語講読の授業を行っている。このような、本研究室が開講母体となっていない西洋古典関連の授業を受講することも可能である。

この他、本専修課程には、学生同士の交流を深めるために、「クラシカルセミナー」という主に大学院生たちが自主的に運営する研究発表や討論の場がある。ひと月に1回もしくは2回くらいの頻度で行われるこの会合が、他の学生や教員の前で自分の研究について語る機会となる。他の人々が自分の研究をどうとらえるか、反応を知ることでもある。通常では、博士論文、修士論文、卒業論文を抱えている人の中間報告（や事後報告）の機会、さらには学会発表の予行練習の機会として利用されている。あるいは、新しく進学した学部3年生の自己紹介の場として、入学した大学院生が自己紹介を兼ねて自分の取り組んでいる研究について語る場としても機能している。このような意味で、本研究室において、「クラシカルセミナー」は教員が行う授業以上に大切な研鑽の場であり、また情報交換の場である。ここ2年くらいは、主にオンラインで行われているが、再び対面で開催可能となった場合には、学生間の親睦を深める絶好の機会にもなることだろう。

(1) でも述べたように、西洋古典学は長く欧米で研究されて来た経緯があるから、想像以上に多くの研究者が欧米文化圏をはじめとして、世界の至る所に遍在している。現在世界は感染症や紛争などを抱え、先行きは不透明ではあるが、可能な限り国内外から研究者を招聘し、活発な学术交流が実現するように心がけている。また、状況が許すようになれば、ヨーロッパの西洋古典学の雰囲気味わうために、たとえば2019年以前にオックスフォード大学で行われてきた夏季短期留学プログラム(TOPS)も再開されることだろう。他の国々における短期留学プログラムも、意欲的に検討している。

(3) 卒業後の進路

卒業後は、企業に就職する人、官公庁に入る人、起業を志す人と様々であるが、ここ数年は大学院進学希望者が増加する傾向がある。また、大学院進学後に大学のみならず、中学校、高等学校で教職に就く人もいる。あるいは、海外の大学に留学する人も少なくない。

(4) 最後に

(2) でも述べたが、古代ギリシア語やラテン語を学んでいることは進学
の必須条件ではない。授業や卒業論文作成で利用することになる注釈書
や研究書には、英語以外ではイタリア語、フランス語、ドイツ語などヨー
ロッパの言語で記されたものが多いけれど、こうした言語を初修外国語と
して、あるいは第3外国語として学ぶことに拘る必要もない。そして、進
学前の段階で、時間をかけて取り組んできた勉学や勉学以外の諸活動や経
験が無駄になることもない。何故ならば、我々の学問は広大無辺であり、
懐が深く、およそ人間の様々な営為で西洋古典学と無縁なものは何一つな
いからである。